

若者文字の考察

——平仮名の学習から——

On the Penmanship of Young People :
An Example from a Class in Hiragana

吉沢 義和

丸字、まんが字などの言回しで、一時期社会問題ともなった若者たち、特に中学生から高校生の女子生徒の手書き文字の乱れが取り上げられてから10年余の歳月が流れた。当時現行の学習指導要領に向けて改訂の準備が進められていた。1982年（昭和62年）12月には臨時教育審議会の提言を踏まえて、教育課程審議会がその答申を発表したのである。答申の中でもとりわけ、文字を含めた言語感覚の喪失の問題が喚起された。その答申に示された国語科書写に関する改善事項は、

◇小学校

「書写については、文字を正確に書く力をつけるため、内容の示し方を改めることとし、特に毛筆による書写について、その指導時数を増やしそれを明示する。」

◇中学校

「書写については、これを〔言語事項〕に位置付け、文字を正しく整えて書くことができるよう内容を重点化するとともに、指導時数を増やすようにする。」

と出された。

特に中学校の書写が、従来の「表現」から〔言語事項〕へ位置付けが変更されたことは大きなポイントである。このことは若者の書写力の低下、文字の乱れを是正するためには、学校教育において、正しく整った文字を

書く能力を養うことがより重要であるという判断にもとづくものである。そのためには〔言語事項〕に位置付け、小学校と整合性を持たせたものと考えられる。

ところで最近では丸字、まんが字という言葉回しが聞かれなくなった。このことは学校教育の中で文字教育がより充実し、教育効果が上がったことによるものか、それとも丸字やまんが字を見慣れたことによりそういう言回しをしなくなったのであろうか。後者だとすれば考え直さなければならないところであるが、かつての極端な丸字やまんが字は姿を消してきたようである。一時の流行であったのであろうか。

最近の新たな現象としては、科学の進歩に伴い、書くことが手から機器にとって代わり、文章を見ても個性のないものが増えてしまったことである。文書、会議資料、掲示物、更には時節の挨拶状（年賀状や暑中見舞など）までも機器に頼っている。表裏に一文字も手書き文字のない挨拶状をいただくことがある。一度機器にインプットしておけば年月を変えるだけで毎年同じものが見えるという具合であろう。まことに都合のよいことであろうが、受け取る側にしてみれば寂しい限りである。手書きの文書には書いた人の個性や心が宿っているといわれる。もっと手書きを大切にしたいと思うこの頃である。

さて、このような状況が手書き文字に対する意識を薄れさせ、文字感覚を鈍くさせるのではないかと危惧するのである。若いうちから機器に頼った表記をしていると、ますます手書き文字への感心が薄れていくことであろう。漢字にしても仮名にしても文化の一つである。特に仮名（片仮名、平仮名、変体仮名など）は日本の文化の代表となるものであると考える。日本の国際化に向けて、日本の伝統文化の継承が尊ばれている今日、仮名を大切にす精神を更に養いたい気持ちを深めたい。中でも、平仮名をより整えて書けるようになれば、手書きの文章はどれだけきれいにみえるようになることであろうか。なぜならば、我々が書く日常の文章は、特殊な内容を除いて、漢字より仮名のほうが多いからである。1984年に開催され

若者文字の考察

た第25回全日本書写書道教育研究会埼玉大会では、「文字意識を高め表現力を育てる書写書道教育」というテーマを設定し研究協議をした。時機を得たテーマであったと当時を振り返る次第である。

最近、中学校の教育実習を終えた学生が、こんなことを話してくれた。「中学生の頃はたしかに丸字やまんが字を書いたが、その使用目的ははっきりしていた。のべつ丸字やまんが字を書いたのではない。しかし、今の中学生は何を書くのにも区別なくわかりにくい文字を書いている。」と。「て」がいちばん読みにくかったようである。どんな字形をしていたか想像していただきたい。

そこで、そういう今日の大学の文字意識や文字感覚はいかなるものであろうかと、条件をつけて平仮名を書いてもらった。その条件とは、①「いろは歌」を想い起こして「いろは順」に書くこと、②筆記用具は2Bの鉛筆を使用すること、③鉛筆を芯の先は鋭くしないこと、④細筆を使うような意識で、ていねいにゆっくりと運筆すること、⑤漢字の楷書に調和するような字形を想定すること、とした。その結果の中から特に目立った字形を取り上げて考察してみることにする。尚、対象人数は男女合計89名である。

い：二筆の長短の違い、その方向と位置。

ろ：基本形。終筆の方向とそのはらい。

は：基本形。第一筆の長さとその方向。第三筆のむすびの要領。

に：第一筆の長さ。第二、三筆の長さ、位置、方向。

ほ：第一筆の長さ。第二、三筆の長さ、位置、方向。第四筆のむすびの要領。

へ：平仮名としての円味。基本形。

と：第一筆の傾きとその位置。第二筆の形。

ち：基本形。終筆の方向とそのはらい。

り：二筆の長さの違いとその方向。

ぬ：基本形。むすびの位置とその要領。第一、二筆の傾き。

- る：上部と下部の調和。むすびの位置とその要領。
- を：第一、二筆の交わる位置。第二筆の要領。第三筆の形。
- わ：第一筆の傾きとその長さ。第一、二筆の調和。終筆のはらいの方向。
- か：基本形。第三筆の長さ、位置、方向。
- よ：筆順。第一筆の方向。第二筆の縦の方向とそのむすびの要領。
- た：第一、二筆の構成。第三、四筆の位置とその方向。
- れ：第一筆の傾きとその長さ。第一、二筆の調和。終筆のはらいの形とその方向。
- そ：基本形。終筆の形。
- つ：はらいの方向。終筆の位置。
- ね：第一筆の傾きとその長さ。右縦線の方向。むすびの位置とその要領。
- な：基本形。むすびの要領。
- ら：筆順。第一筆の方向とその位置。第二筆の縦の傾き。終筆のはらいの方向。
- む：基本形。第二筆の終筆の要領。むすびの要領。点の位置。
- う：点の傾きとその位置。はらいの方向。
- る：使用頻度は少ないが覚えておく。基本形。むすびの要領。
- の：基本形。はらいの方向。
- お：第二筆の要領とその終筆の方向。点の位置。
- く：平仮名としての円味。
- や：筆順。基本形。第二筆の位置とその方向。
- ま：第一、二筆の長さの違い。むすびの要領。
- け：基本形。第一筆の長さとその方向。第三筆の方向。
- ふ：基本形。
- こ：二筆の長さとその方向。
- え：基本形。点の方向とその位置、終筆の要領。
- て：基本形。横線の傾き。終筆の要領。
- あ：第一筆の長さ。第二筆の傾きとその長さ。終筆のはらいの構えとそ

の方向。

さ：第一、二筆の構成。第二筆の長さとその傾き。第三筆の位置とその方向。

き：第一、二筆の長さとその傾き。第三筆の長さとその傾き。第四筆の位置とその方向。

ゆ：基本形。第二筆の位置とその長さ。

め：第一、二筆の傾き。

み：基本形。第二筆の長さとその方向。

し：終筆の長さとその方向。

ゑ：使用頻度は少ないが覚えておく。基本形。

ひ：基本形。傾きの程度。

も：筆順。第二、三筆の長さとその方向。

せ：筆順。基本形。第三筆のまがりの要領。

す：むすびの位置とその要領。

ん：基本形。はらいの方向。

(注)

基本形として指摘したのは、多くの者がその文字の基本的な字形を心得ていないことを意味する。

小学校入学当初における平仮名の学習ではほぼ同じ規準によるのと考えられる。つまり、学習指導要領には、漢字の指導について「指導計画の作成と内容の取扱い」に「漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること」と示されている。そして、その学年別漢字配当表は教科書体活字で示されている。このことから平仮名も漢字に準じて、その基本形は教科書体活字に依るものと考えられるわけである。こうした規準のもとに学んだことが、時を経るに従ってまさしく个性的になってしまったのである。十人十色というが、前述したように手書き文字には個性や心がにじみ出ているというわけであるが、まさにそのとおりである。どこでこのように変わっていくのであろうか。初期の段階においては、教師は児童が反射的にわかるような指導方法を工夫されていると考えられる。しかし、平仮名の字母(字源)を取り上げての指導はされていないであろう。そこで、平仮名の字形をより正しく整えて書くためには、その一字々々を

それぞれの字母（字源）と関連付けて学習することが肝要である。その時期は中学校段階がよいと考える。大抑であるが、日本の伝統的な文化の一つと考えられる平仮名をもっと大切にしたいと考える者である。時を改めてその学習の要領をまとめてみたい。

い	い	い	い	い	い	い	い
ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ
は	は	は	は	は	は	は	は
に	に	に	に	に	に	に	に
ほ	ほ	ほ	ほ	ほ	ほ	ほ	ほ
へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ
と	と	と	と	と	と	と	と
ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち
り	り	り	り	り	り	り	り
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
る	る	る	る	る	る	る	る

を	を	を	を	を	を	を	を
わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ
か	か	か	か	か	か	か	か
よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ
た	た	た	た	た	た	た	た
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
そ	そ	そ	そ	そ	そ	そ	そ
っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ
ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね
な	な	な	な	な	な	な	な
ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら

む	む	む	む	む	む	む	む
う	う	う	う	う	う	う	う
ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ	ゐ
の	の	の	の	の	の	の	の
お	お	お	お	お	お	お	お
く	く	く	く	く	く	く	く
や	や	や	や	や	や	や	や
ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
け	け	け	け	け	け	け	け
ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ	こ

え	え	え	え	え	え	え	え
て	て	て	て	て	て	て	て
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ
き	き	き	き	き	き	き	き
ゆ	ゆ	ゆ	ゆ	ゆ	ゆ	ゆ	ゆ
め	め	め	め	め	め	め	め
み	み	み	み	み	み	み	み
し	し	し	し	し	し	し	し
る	る	る	る	る	る	る	る
ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ

